日光保育

倉橋惣三

燃料が缺乏しても、日光のあたゝかさがある。食糧が充分でなくても、日光の榮養作用がある。戰時幼兒生活に、こんな貴重なものはない。これほど活用しなければならぬものはない。勤勉な農夫が日光を尊重することは昔からであるが、今日の增產において、それが如何に强いことであらう。「いゝお天氣さま」は彼等の感謝に充ちた讃歌である。まめやかな主婦が日光を惜しむのは誰れでもであるが、今日の多忙において、それがさぞかし一層のこであらう。「結構なおひより」は彼女等の喜びに充ちた讃語である。彼等も彼女等も日光の活用に今日ほど眞劍なことはないといつていゝであらう。そのために自らまつ黑に日にやけてゐる。

今日、日光活用に最も眞劍な一人が、戰下の幼兒生活を護り、强く逞しく保育することを任としてゐる保姆諸君でなければならぬことは論を俟たない。しかも、そのために必要な勞力は極めて少ない。たゞ窓を開けばいゝのである。戸外に出ればいゝのである。一擧手一投足の勞とはこのことである。たゞ、愛する幼兒に少しでも多く日光を與へたいといふ心の有り無しだけが問題になる。

日光の絕大な保健的效果と共に、われらの日光禮讃の一つは、その偉大な精神的效果にある。その光は幼兒の心を明るくし、その溫かさは幼兒の心を溫かにする。暗さと、冷さ程、幼兒の精神に嚴禁なものはない。それを除き防ぎ、不斷の明と溫とを、その性格に與ふることに、幼兒教育はたえず留意する。しかも、最も容易にそれを解決し實現して與れるものは日光である。子ども達を日光の前に、裡に、連れてさへゆけばよいのである。但し、いつの場合でも同じように、子どもをよきものに連れてゆくことは、たゞ手をひき、足を導くだけのことではない。心が心を誘ひ、導いて、連れてゆかなければならぬ。その點において、保姆その人が先づ、日光を好み、日光を愛するのでなくてはならない。而して、日光を愛好する人は、自ら先づ、明るく溫い性格の人でなければならない。

眞に日光を愛好することなく、日なたに對して不精な先生に保育せられる幼兒ほど不幸のものはない。その先生は、幼兒達の日なたへの願ひをさへ拒むのである。折角くの秋晴を、窓の外に閉ぢ、戸外に遠ざけて、その日光の愛情と恩惠と、あの深い教育力とを幼兒達に受けさせようとしないのである。

生長は皆日光の下にある。生長するものは皆、日光を求める。幼兒は生長するものである。保育は幼兒を生長させることである。保育者の理想は日光である。その典型も模範も日光に似ることである。幼兒達と共に日光に出る前に、先づ自ら日光に浴して、その光りと溫さと、幾多貴重なる放射線とを、豐にふつくらと身に受けようではないか。そうして、そのふく〳〵とした性格を以て、幼兒を日光の子たらしめる、日光の先生とならうではないか。